

地域連携・国際センター一年報

平成 21 年度地域連携・国際センターの主な事業報告

Ⅰ. 地域連携国際センタープロジェクト関連事業

(1) 看護専門職員研修

【救急看護認定看護師教育課程】

救急看護認定看護師制度は 1996 年に発足し、1997 年に救急看護認定看護師が誕生している。本教育課程は 2005 年に教育機関として認定をうけ、2009 年までの 5 年間で 51 名の修了者を輩出した。

1) 概要

開講期間は 6 月 4 日（木）～12 月 3 日（木）までの 6 ヶ月間であった。受講者は 12 名（定員 10 名）であり、北は北海道から南は沖縄までの全国から参集した。

2) 内容

科目と時間は日本看護協会の基準カリキュラムを基に作成した。

(1) 共通科目 105 時間

共通科目はリーダーシップ、情報処理など、すべての認定分野で必要とされる事項について受講する。2009 年度は本教育課程の他に「がん化学療法看護認定看護師教育課程」も開講し、合同講義として行われた。グループワークでは 2 課程の受講者で活発な意見交換が行われた。

(2) 専門基礎科目 120 時間

専門基礎科目は 1) ヘルスアセスメント、2) リスクマネジメント、3) 救命技術の理論と実践の 3 科目から構成される。ヘルスアセスメントではフィジカルアセスメントについて学習した後、小児、妊産婦、高齢者のそれぞれ発達段階に応じたアセスメントについて学んだ。また、リスクマネジメントではミスのおきやすい救急医療の場で、安全な医療、看護を提供するために認定看護師としてどのような行動をとるべきかについて学習を深めた。

(3) 専門科目 180 時間

専門科目は 1) 救急看護概論、2) 救急看護技術、3) 病態とケア、4) 救命技術指導、5) 災害急性期看護の 5 科目から構成される。救急看護技術では早期のリハビリテーションを行う意義や実際の手技を学んだ。また、救命技術指導ではグループに分かれ、ディスカッションを行いながら指導案、教材の作成に遅くまで残って取り組む姿がみられた。

(4) 演習および臨地実習 240 時間

2009 年度の臨地実習は青森市、弘前市、八戸市、岩手県、宮城県の 5 施設で行った。これまでの講義、演習での学びを統合しつつ、各施設ですでに活躍している認定看護師の姿を見ながら、将来の自分自身の認定看護師像をつくりあげていた。

その後の事例検討、ケースレポートでは、臨地実習で得た学びを他者へ伝える過程を通じて救急看護に対する考えを深めることができた。

文責：佐々木雅史

【がん化学療法看護認定看護師教育課程】

認定看護師制度は1996年に発足し、がん化学療法看護認定看護師は2000年10月に日本看護協会神戸研修センターで誕生した。本教育課程は2009年度、教育機関として認定を受けた。

1) 概要

開講期間は6月4日(木)～12月3日(木)までの6ヶ月間であった。受講者は16名(定員20名)で、受講生は青森県内のみならず、県外からも参加した。

2) 内容

科目と時間は日本看護協会の基準カリキュラムを基に作成した。

(1) 共通科目 90時間

共通科目はリーダーシップ、情報処理など、すべての認定分野で必要とされる事項について受講する。2009年度は「救急看護認定看護師教育課程」と合同講義として行われた。グループワークでは2課程の受講者で活発な意見交換が行われた。

(2) 専門基礎科目 120時間

専門基礎科目は1)がん看護学総論、2)症状マネジメント論、3)腫瘍学概論、4)がん化学療法概論、5)臨床薬理の知識と活用方法、6)臨床試験と治験コーディネーター、7)がんの医療サービスと社会的支援の7科目から構成される。

(3) 専門科目 150時間

専門科目は1)がん化学療法患者・家族のアセスメント、2)主要ながん化学療法薬レジメンとリスクマネジメント、3)がん化学療法薬の投与管理とリスクマネジメント、4)がん化学療法に伴う身体の変化と症状緩和技術、5)がん化学療法患者へのセルフケア支援、6)がん化学療法に伴う患者・家族の意思決定を支える看護援助、7)外来/在宅がん化学療法と看護援助の7科目から構成される。

(4) 演習および臨地実習 240時間

内訳は、学内演習60時間、臨地実習Ⅰ45時間、臨地実習Ⅱ135時間である。臨地実習Ⅰは、受講生の所属する施設で行うこととなっており、自施設におけるがん治療に関するチーム医療の活動と実際について把握し、課題を明確にすることを主な内容としている。臨地実習Ⅱについては、2009年度は青森市、八戸市、三沢市、岩手県、埼玉県、神奈川県等の8施設で行った。臨地実習Ⅱにおいては、これまで学習した知識と技術を統合し、認定看護師の役割である「実践」、「指導」、「相談」について展開することを目標としている。

文責：嘉山恵子

【認定看護管理者教育課程(セカンドレベル)】

1. セカンドレベル実施概要

平成 21 年度は、セカンドレベルの教育課程を開講した。(4 期日)

- 1) 日程：第 1 クール 平成 21 年 6 月 15 日～6 月 30 日
第 2 クール 平成 21 年 7 月 21 日～8 月 1 日
第 3 クール 平成 21 年 8 月 17 日～9 月 1 日 全 32 日間 (192 時間)
- 2) 受講生：30 名 (2 クール目より健康上の理由で 1 名辞退 修了生 29 名)
副看護部長・副総看護師長等 3 名、看護師長等 23 名、主任・副師長等 3 名
青森県内 29 名、県外 1 名 女性 29 名 男性 2 名
- 3) 内容：
 - ・カリキュラムは、「医療経済論」「看護組織論」「人的資源活用論」「情報テクノロジー」の 4 つの教科目からなり、講義と演習で構成している。時間数は規定の 180 時間の他に、オリエンテーション・プレゼンテーション等 12 時間を加え、計 192 時間であった。
 - ・講師は、県内外の専門分野の教育・研究・実践者が担当し、学内の教員の協力も得た。
 - ・学習方法は、成人学習として主体的に展開することを目指し、講義、演習、ディベート、プレゼンテーションを取り入れた。
 - ・演習・課題レポートのテーマは「自分が所属する組織(病院/看護部/病棟等)における問題点を分析し、改善計画を立てる」とし、教育課程での学びと実践を統合できるように支援した。
2. セカンドレベルフォローアップ研修
 - 1) 目的：セカンドレベル修了者が立案した組織の改善計画の実施を推進すると共に、修了者の看護実践能力の向上を目指す。
 - 2) 開催日：平成 22 年 2 月 20 日(土)
 - 3) 場所：浅虫温泉 海扇閣 1 階 コンベンションホール四季
 - 4) 参加者：平成 21 年度セカンドレベル修了者 27 名、演習支援者 5 名、
修了者所属施設看護管理者 2 名、青森県内認定看護管理者 3 名、
これまでの修了者 10 名、教員 3 名 計 50 名
 - 5) 研修内容：セカンドレベル修了後の実践状況報告及びコンサルテーション

文責：村上眞須美

(2) 社会福祉研修

平成 18 年度から本学で実施している社会福祉研修事業につきましては、今年度も引き続き県から委託を受け実施いたしました。

本学の理念である「ヒューマンケア」を目標に、本学の有する教育・研究機能を生かし、良質で福祉の現場のニーズに即した研修機会を提供することによって、本県の社会福祉の人材育成に寄与しているところです。

とりわけ県が昭和 26 年から実施してきており、全国的に見ても長い歴史をもつ社会福祉主事資格認定講習会を引き続き実施し、今年度は 48 名の社会福祉主事任用資格取得者を輩出しております。

一般研修につきましては「トップセミナー」「セーフティ・ネット・フォーラム」など年間 21 件の研修を実施いたしました。

今後とも、関係者の皆様の声を生かした新たな企画に基づく研修を実施して参りますので、よろしくお願い申し上げます。

(参考：平成 21 年度実績)

研 修 名	日 数	参 加 者 数 (人)
社会福祉主事資格認定講習会	5 2	5 1
一般研修 (21 本)	2 3	1, 6 0 9
合計 (21 本)	7 5	1, 6 6 0

文責：佐藤里美

(3) 学び直し研修

1. 背景

文部科学省の委託事業である「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」とは、社会人の再就職やキャリアアップ等に対しての実践的教育に支援されるもので平成19年より3か年事業として、本学の「医療安全にかかわる看護技術「静脈注射」の学び直しプログラム」が採択され、本年が最終年度となった。

「静脈注射」は、従来、看護師の業務範囲を超える医行為であるとされてきたが、2002年に「診療の補助行為の範疇である」と行政解釈が変更された。このことから看護師が専門職として安全に静脈注射を実施できる能力が問われることとなった。本事業では、現職者に対する技術向上や職場復帰を考えている潜在看護職者（出産や育児等で有資格者でありながら現在勤務していない看護職者）が看護技術習得により再就職のモチベーション向上により再就職につながることを目的とした研修会を実施した。初年度は、採択年だった関係もあり現職看護職のみの研修であったが、本年度から潜在看護職者も対象にしている。

2. 研修の概要

講義に加えeラーニングを取り入れた。特に静脈注射の実技に関しては腕モデルや医療器材を使用した実践型の内容とした。4日間の受講と課題レポート提出、修了試験60点以上の者に修証明書として「医療安全技術認定書（静脈注射）」を交付しました。

	平成21年度日程	対象/受講人数
第1回	21年7月2日、3日、10日、11日	潜在看護職者/25名
第2回	21年9月10日、11日、17日、18日	現職看護職者/40名

※定員は30名とした

3. 事業報告会について

今年度が最終年度であることから、事業成果報告会を開催した。

開催日時：平成22年2月5日

場所：青森県観光物産館アスパム

内容：[第一部]3年間の事業報告、[第2部]講演：北里大学病院看護部長 別府千恵氏

参加人数：70名

4. 今年度のまとめ

都合により全日程を受講できなかった者以外、課題レポートは全員より提出された。修了試験を受けた者は全員60点以上であり修了認定の基準を満たしていた。よって、第1回は25名、第2回は39名を修了認定者とした。第1回目の潜在看護職対象の研修では学内に託児所を設置した。

事業報告会アンケートでは概ね満足であるという意見を頂いた。また今後の研修については、有料無料にかかわらず大学として継続してほしいという意見が多かった。

文責：嘉山恵子

II. 研修科事業報告

(1) 平成 21 年度の研修科事業の概要

◆研修科委員会の開催状況

- ・第 1 回委員会：平成 21 年 4 月 22 日
平成 21 年度事業計画について、委員会開催日について
- ・第 2 回委員会：平成 21 年 5 月 19 日
平成 21 年度教育改善研究・研修企画・ブックレット 各要項について
- ・第 3 回委員会：平成 21 年 6 月 24 日
第 9 回ケアマネジメントフォーラムについて
- ・臨時研修科委員会：平成 21 年 7 月 1 日
- ・第 4 回委員会：平成 21 年 7 月 24 日
教育改善研究助成、研修企画実施助成審査結果について
- ・第 5 回委員会：平成 21 年 9 月 10 日
予算執行状況について、卒業生対象研修事業について
- ・第 6 回委員会：平成 21 年 10 月 13 日
予算執行状況について、卒業生対象研修事業について
- ・第 7 回委員会：平成 21 年 12 月 7 日
ケアマネジメントフォーラムについて、卒業生対象研修事業について
- ・第 8 回委員会：平成 22 年 2 月 9 日
助成事業予算執行状況について、各種事業の実績報告書の様式について
- ・第 9 回委員会：平成 22 年 3 月 31 日
研修科事業執行状況、各種事業の実績報告書の様式について

(2) 第 9 回ケアマネジメントフォーラム I N 青森

1. 企画の背景

対人援助職（ケアマネジャー）の役割は、ますます重要になってきているが、現場においては、一人で困難ケースの対応を判断し、援助していることも少なくない。対人援助職（ケアマネジャー）をサポートするスーパーバイザーを確保することも困難である。この研修企画は、対人援助職（ケアマネジャー）の日々の職務に役立ち、開催の意義は大きいと考える。

2. 研修目的

地域住民を支援する保健医療福祉専門職を対象として、実践報告などを通して、対人援助職（ケアマネジャー）としての資質向上を目的とする。

3. 研修受講者

保健医療福祉専門職：151名（参加者名簿を添付）

4. 開催日時および場所

平成21年11月6日 青森県立保健大学 A111

5. 研修内容

テーマ：対人援助職（ケアマネジャー）の価値と倫理について考える

形式：基調講演、シンポジウム

1) 基調講演講師：石田賢哉講師（本学社会福祉学科）

内容：「対人援助職（ケアマネジャー）の価値と倫理」

2) シンポジウム

コーディネーター：大和田猛教授（本学社会福祉学科）

テーマ：「対人援助職（ケアマネジャー）が現場で抱える価値と倫理」

シンポジスト1：須郷千鶴子氏（青山荘居宅介護支援事業所）

内容：「援助の場で見られる利用者本位」

シンポジスト2：今栄利子氏（青森慈恵会病院総合相談室）

内容：「医療ソーシャルワーカーの立場から」

シンポジスト3：二本柳智恵子（東通村地域包括支援センター）

内容：「村でともに暮らす立場から考えること」

6. 研修の成果および評価

研修会終了後、アンケート調査を実施した。参加者151名のうち、135名（回収率89%）から回答をいただいた（詳細はアンケート結果参照）。研修の満足度は、「満足した」28%、「やや満足した」49%であった。今後の職務に「役立つ」53%、「役立つかもしれない」31%であり、研修会の評価は良好であった。

検討すべき意見として、「個人情報の観点から名簿を参加者に配布するのは問題ではないか」、「意見交換がしやすいようにシンポジストの内容の焦点をわかりやすくしてほしかった」などであった。

7. 反省点（次年度への改善点など）

参加者数は、過去最高となったが、予定していたシンポジストが1名減となり、シンポジウムの質疑応答が少なく、予定時間を繰り上げて終了となった。シンポジストの発表時間や進め方等、次年度に向け検討する。また、アンケート結果にもあったが、参加者名簿については、次年度は配布しない。社会福祉研修と勘違いして有料講習と誤って来ていた参加者も数名いたため、開催案内に受講料について明記する。

(3) 卒業生を対象とした研修会

地域貢献の一環として、本学の卒業生を対象としたリカレント教育の実施を企画した。本年度は、各学科ごとに企画し、実施された。事業は以下のとおりである。

<看護学科>

1. 日時：平成 21 年 8 月 4 日（火）10：00～12：30
2. 場所：青森県立保健大学 A棟 1階 A110 教室
3. 内容：①講演「妊娠・授乳期の栄養管理について」 10：00～11：30
講師 吉岡美子（青森県立保健大学栄養学科）
②交流会 11：30～12：30
4. 参加者：37名{看護学科卒業生 15名、在校生 11名、管理栄養士 1名、
教員 10名（うち学部・大学院卒 6名）}
5. 評価

21 年度は、助産師、保健師として妊産婦の看護・保健指導に従事する卒業生に焦点をあてて、研修会を企画し、本学栄養学科の吉岡美子氏に妊娠・授乳期の栄養管理について、妊産婦のための食生活指針の内容を含めて講義していただいた。助産師 5 名、保健師 9 名、看護師 1 名の卒業生の参加があり、講演は「非常によかった」47.1%、「まあまあよかった」52.9%で、臨床にいると得られない知識を得ることができた、今後の指導の参考になったなどの意見が多く聞かれた。卒業生と在校生の交流会では、在校生から現場の声を聞くことができるとてもよかったとの意見が聞かれた。また、今後の研修会のテーマとして、コミュニケーションスキル、新人教育、学生指導、エンゼルケア、グリーフケア、糖尿病、乳幼児期の栄養などを取り上げてほしいとの要望があった。

担当：吹田夕起子

<理学療法学科>

1. テーマ：「膝の機能解剖と徒手テスト」
2. 日時：11 月 22 日（日）13：30～16：30
場所：青森県立保健大学 第 1 運動療法学実習室（B308）
3. 講師：和久井鉄城（本学 1 期生）
医療法人鎮誠会 姫島クリニック リハビリテーション科
4. 参加者：理学療法学科卒業生 19 名（講師除く）、学生 13 名
5. 内容：昨年度に引き続き、本学 1 期生である和久井鉄城氏をお招きし、膝の機能解剖と徒手テストについて講義ならびに実技指導を行っていただいた。今回参加した卒業生はまだ臨床経験が短い方が多かったため、深く細かい内容で多いに刺激を受けたようである。また、学生にとっては少し難しい内容であったが、長期実習や勉強の仕方の参考にはなったようである。この研修会は、卒業生のための研修会ではあるが、卒業生同士の縦、横の繋がりを広げるだけでなく、卒業生と在校生の交流の場にもなっているので今後も継続して行っていきたい。

担当：福島真人

＜社会福祉学科＞

「開学 10 周年記念第 1 回保健大学社会福祉学科研修会」として、平成 21 年 10 月 10 日（土）10 時から 11 時半の 90 分間で開催された。開催場所は青森県立保健大学 C 棟 N 講義室 - 1。内容は、基調講演『社会福祉学科卒業生の研修ニーズの実態と今後の課題－社会福祉学科としての卒業生フォローについて－』（社会福祉学科 石田賢哉講師）、「保健大学卒業生へのフォローについて（社会福祉学科としての考え）」（社会福祉学科長 大和田猛教授）、意見交換（交流会）であった。参加人数は 17 名で、内訳として 1 期生 3 名、2 期生 2 名、3 期生 3 名、4 期生 4 名、7 期生 5 名であった。参加者の現在の実践現場は病院、特別養護老人ホーム、児童養護施設、障害者支援施設と幅広く、どのような内容で卒業生対象研修を企画していくか課題はあるものの、参加した卒業生からは定期的に研修を開催してもらいたいといった声が聞かれた。分野の異なるソーシャルワーカーのネットワーク構築や保健大学卒業生としてのつながりをさらに強化したいというニーズがあると思われる。卒業生の声を大切にしながら、社会福祉士会等の職能団体と連携していきながら卒業生対象研修ニーズを継続的におこなっていききたい。

担当：石田賢哉

（４）研修企画・実施助成事業

県内の保健医療福祉専門職を対象とした研修企画を募集し、助成を行った。採択された研修企画については事業実績報告書参照のこと。

（５）教育改善研究助成事業

本学の教育方法等の改善に資するための研究課題を募集し、助成を行った。採択された教育改善課題については事業実績報告書参照のこと。

（６）ブックレット作成事業

本学教員の研究成果を県民に還元することを目的として、継続的な小冊子の発行を昨年度に引き続き行った。発行されたブックレットについては事業実績報告書参照のこと。

理学療法学生の危険に対する感性を高める危険予知訓練（KYT）の開発

担当者名 岩月 宏泰¹⁾、堤 絢菜²⁾、須郷磨衣子¹⁾、藤田智香子¹⁾

1) 青森県立保健大学、2) 青森慈恵会病院

1. 研究の背景

現在、ヒューマンサービスを提供する医療、保健及び福祉の分野ではKYTと5Sが効果的な安全教育の手法として広く認識されているが理学療法教育としての導入は進んでいない。ところで、ここ数年臨床実習指導者から本学科に対してコミュニケーション能力やリスクマネジメント能力を培う学習にも重点をおくよう求められるようになってきた。

2. 研究目的

本研究ではヒューマンエラー要因に対する感性を高めることに効果を挙げているKYTを理学療法の学内教育に導入するための教材作製とそれを使用した演習の効果について検討することを目的とした。

3. 研究成果

対象者は本研究の趣旨を了承し、ポスターによる募集に応じた本学科3、4年生10名であった。

1) 本研究で開発した写真シートと演習

全対象者に行ったアンケート結果では、写真シートの理解が十分出来た者は9名であったが、危険のポイントを探し出すことが十分出来なかった者が3名であったことから、写真シートの意図された危険要因はほぼ理解されていた。また、本演習で行った講義及び演習については学生全員がよく解ったと回答しており、効果があったと思われる。但し、この「KYTを自分で実施できそうか」の問いに対しては「わからない」と回答した者が4名いることから、演習の積み重ね、内容の工夫など慎重な吟味が必要と考えられた。

2) 各グループで作成されたKYTシートの評価

第1ラウンド（現状把握）ではPTの担当患者への配慮の足らなさを指摘しているものが多かった。しかし、写真シートの人物を第三者的立場から批判してしまうと、「○○すると・・・」というような将来予想される変化が考えにくくなる。ここでの話し合いは各々の出来事に対して、危険要因を「何故」（そうなったのか）と質問を投げかけることで、事故発生の重要なポイントを見出すことが出来る。一方、第3ラウンド（対策樹立）ではリーダーがメンバーに「これまで考えた危険要因が現実化しないためにはどうすればよいか」を問いかけて、メンバーは具体的な予防対策を挙げ、討議を重ねることが要求される。KYTシートでは全てのグループが具体的な対策を挙げることができたが、写真シートの人物の立場になり、一人称で対策を考えるまでには至らず、他者依存、抽象的な表現での対策に留まっていた。ここでの対策はPTの職務への態度だけでなく、「良い状態をつくるための積極的な行動」まで踏み込んで考える必要があるため、指導者による最小限度の助言が必要と考えられた。今回のKYT研修は所定の臨床実習を終えた4年生と臨床実習前の3年生を交えたグループで実施したことで、後者の学生にヒューマンエラー要因を“気づく”能力を高めることが確認された。また、教員にとっても学内での医療安全教育の教授方法、演習の改善のためのヒントが得られた。

4. 研究成果の公表および活用

1) 岩月宏泰、堤絢菜、須郷磨衣子、藤田智香子：理学療法学生の危険に対する感性を高める危険予知訓練（KYT）のための教材開発とその効果に対する検討。2009年度青森県保健医療福祉研究発表会，2010年2月12日，青森市。

2) Iwatsuki H, Iwatsuki J: Kiken Yochi Training (KYT) for Hospital Employees: Sustained Reduction of Environmental Hazards to Hospitalized Physically Handicapped Patients. The First Asia-Pacific Conference on Health Promotion and Education (APHPE), Abstract 291, 2009年7月18-20日，幕張市。

社会福祉実習指導教材の開発

増山 道康¹⁾

1) 青森県立保健大学健康福祉部社会福祉学科

1. 研究の背景

この研究は、社会福祉学科 1～3 年生の社会福祉現場実習を社会福祉士課程の科目改訂と実習先の変更を伴う社会福祉士国家試験受験資格賦与のための実習体系再構成と県内の介護保険事業者、障害者自立支援事業者の変動により、平成 18 年度に作成した実習の手引き（青森県内施設一覧）の改訂が必要となったため企画された。

基礎実習 I・II（1・2 年生）とソーシャルワーク実習（3 年生）の実習先選択と実習指導に直接関わる教員と実習を選択した学生の両者ともに役立つ教材開発をめざした。

2. 研究目的

社会福祉学科 1 年・2 年の社会福祉基礎実習・実習指導と 3 年のソーシャルワーク実習の実習先選択のための基礎資料及び、実習前指導における実習先調査、実習対象施設調査と実習後指導における下位学年を対象とした学内実習報告会発表原稿及び実習報告書作成のための基礎資料集兼実習の手引きとして役立つ小冊子の作成をめざした。

但し、実際の利用の便宜性を高めるため CD ロムによる提供をめざすことにした。

3. 研究成果

社会福祉士国家試験の変更による社会福祉援助実習の充実を図る為には、県内にある社会福祉に関する社会資源の現状を十分把握する必要がある。特に、障害者自立支援制度による従来の施設体系から自立支援事業への移行により社会資源が急増しているため、障害者関係のサービス、施設等の把握は困難となっていたが、今回の教材開発により、県内事業者のほとんどが把握できた。

また、教材作成過程では、3 年生の一部の協力を得たが、協力者たちの調査能力や自発性、協調性が教材作成の進行につれ、特段に高まった。なお、完成品は、教材としてだけでなく、広く大学広報や就職活動にも役立つことが実証された。

4. 研究成果の公表および活用

作成した CD ロムは、社会福祉学科教員及び在校生（1～3 年生）約 150 人に配付した。新年度には、新入生約 55 人に配付を予定している。

基礎実習 I・II および社会福祉援助技術現場実習・ソーシャルワーク実習の実習先選定の参考書として、また、それぞれの実習の実習指導中のテキストとして活用を予定している。

社会福祉研修の研修案内や就職相談会への参加案内を施設・事業者等へ周知するための送付先一覧としても利用される予定となっている。

徒手筋力テスト (MMT) 習得に向けた客観的臨床能力試験 (OSCE) の応用

藤田智香子¹⁾, 須郷磨衣子¹⁾, 岩月宏泰¹⁾

1) 青森県立保健大学理学療法学科

1. 研究の背景

1970年代から客観的臨床能力試験 (Objective structured clinical examination:OSCE) は、臨床能力を客観的に評価するものとして医学教育に導入された。近年理学療法教育でも、OSCEは臨床技能の習得を促す演習として徐々に試みられているが、実施方法・評価基準などは充分検証されていない。

2. 研究目的

我々は、昨年度重要な理学療法検査である関節可動域テストの臨床技術習得に向けて、臨床実習前の本学理学療法学科 3 年生を対象に OSCE を実施して有用性を確認した。本研究では昨年度の知見を応用して、徒手筋力テスト (Manual Muscle Testing:MMT) の臨床技術習得に向けて、独自の OSCE 開発を目的とした。

3. 研究成果

【方法】最初に腰部脊柱管狭窄症と椎間板ヘルニアの模擬患者 (Standardized patient: SP) の情報シート・シナリオと MMT の測定手技を評価する独自の評価票 (自己評価と他者評価) を作成した。次に理学療法士 (PT) 有資格者 2 名に SP を依頼し、シナリオに沿って設定した MMT を確認した。対象は研究への同意が得られた本学科 3 年生 8 名 (男女各 4 名)。当日はまず知識を確認する筆記試験を行い、その後独自の OSCE を実施した。手順は①SP の概要が記載されている情報シートから情報収集 ②SP に指定された下肢筋 (左右 9 筋) の MMT を実施。検査風景はビデオに録画し、試験官 (PT 教員) 2 名が測定肢位・方法、注意点等を評価 ③学生が自己評価を記入 ④学生・SP・試験官で測定時の録画を見ながら、注意事項や助言等をフィードバック。後日同様に SP2 の MMT を実施した。

【結果および考察】1. MMT 筆記試験：語句選択式の 15 問で平均点は 15 点中 11.4±2.5 点。平均 76% の正答率で、それなりの知識はあったと考えられる。2. MMT の実測値：腰部脊柱管狭窄症 (SP1) の MMT 設定値と合致したのは、右 (健側) がのべ 72 筋中 58 (80.6%)、左 (患側) が 54 (75.0%)。個々の筋では左右のハムストリングス、右大腿二頭筋、左内転筋で合致率が低かった。ハムストリングスは関連のべ 24 筋中未記載が計 12 箇所あり、記載箇所の誤解も影響したと推測される。椎間板ヘルニア (SP2) での MMT 設定値と合致したのは、左 (健側) が 70 (97.2%)、右 (患側) が 45 (62.5%)。個々の筋では右の後脛骨筋、前脛骨筋、腓腹筋、ヒラメ筋と下腿の筋の合致率が低かった。3. 学生自己評価：SP1 の MMT 実施後、〈少し不十分〉〈かなり不十分〉の回答が 8 名中 6 名 (75%) 以上は、「わかりやすい説明」「指示内容の適切さ」「代償運動への注意」「安楽さや疲労への配慮」「正確な判定」。同様に 5 名 (63%) 以上が「可動範囲の確認」「抵抗のかけ方」「自分の立ち位置」で 10 問中 8 問を占め、自信のなさが伺えた。SP2 実施後は、「代償運動への注意」のみ過半数を超えた。SP2 の患側の合致率は下がったが、全般的に自己評価は向上した。4. 教員評価およびフィードバック：教員評価は SP1 に比し SP2 で改善傾向を示したが、5 段階中 2〈少し不十分〉〜3〈とりあえず一通りできた〉で推移し、4〈だいたいできた〉レベル以上には達していなかった。フィードバックでは SP1 に比し SP2 で改善傾向を示した。SP1 では学生が緊張し、オリエンテーションや基本的知識で指摘を受ける回数が多かったが、SP2 では学生も慣れ、より具体的な測定内容の向上が図られた。学生は SP や患者の評価経験が少なく、1 回の SP 経験では不十分で、数回の OSCE を通して個別に指導を重ねることで知識・技術面の定着が図られることが伺えた。

【結語】SP 2 例目で健側下肢筋の測定と学生の自己評価に改善が認められ、開発した OSCE は学生の自主的な勉強と MMT の技術習得を促すために有用と考えられる。より正確な MMT の技術習得のためには、判定方法の正確な実施と判定基準に沿った見極めおよび自分なりの手順確立と応用能力の育成が必要であり、その点を加味した OSCE の再検討が必要と考えられる。

4. 研究成果の公表および活用

- ・藤田智香子, 須郷磨衣子, 羽場俊宏, 岩月宏泰: 下肢 MMT 技術習得に向けての客観的臨床能力試験 (OSCE) の応用 (第 1 報). 第 34 回青森県理学療法士学会, 2010 年 3 月 13 日・14 日, むつ来さまい館, むつ市, 第 34 回青森県理学療法士学会プログラム・抄録集, p40, 2010.
- ・岩月宏泰, 藤田智香子, 須郷磨衣子, 羽場俊広: 理学療法技術を教授する授業内容の見直しを促す OSCE の効用. 平成 21 年度全国 PTOT 学校連絡協議会教育研修会, 2010 年 3 月 27 日・28 日, 首都大学東京, 東京都荒川区, 2010.

「国際社会と日本の協力」論のテキスト作成

千葉たか子¹⁾

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

1. 研究の背景

本研究は、2009年度より新設された科目「国際社会と日本の協力」論の講義において、履修学生の学習支援するためのテキスト作成である。

この科目の性格や位置づけから、既成の著書あるいは文献などを教科書として採用するのには無理があった。このような背景のもと、テキスト作成の必要性があった。

2. 研究目的

本研究は、本学の学生のニーズに対応した当該科目のテキストの作成が目的であった。

本科目は、国際社会を見つめ、考える視点や態度を養うことがねらいの一つである。それは、近年のグローバル化に対応した人材育成という本学の教育目標にも適うものである。

テキストは、国際社会の理解、国際社会の一員としての日本を相対化する視点を養うこと、近代を理解する力の育成をねらいとした。2009年度の講義に際し、様々な領域の文献や資料の中から必要に応じて参考になる部分を選び出し複写するなどして提供したが、講義の進行と共に、中心となる内容の他に学生が興味・関心をもっている領域について情報を得、テキストに載せる内容などを明確にした。

3. 研究成果

本テキストは、当該科目（前期15時間）の講義に対応するように、15の単元構成とした。必ずしも、1コマで1単元を学ぶわけではないが、学生の自己学習を促すため、まとめやすいように、一つの単元で一つのテーマを扱うようにし、1コマで完結するようにまとめた。

本テキストには、国際社会で働くことを希望する学生に有用と思われる情報、異文化理解、コミュニケーション力と参加力の育成などを意識した内容を豊富に盛り込んだ。また、文化の中でも重要な役割を果たしている宗教（イスラム、キリスト教、ヒンドゥー教）なども詳しく扱った。

本学の学生の興味・関心・必要に応じた構成・内容となったので、授業及び自己学習において、効果的に使用できると考える。

4. 研究成果の公表および活用

このテキストが利用されるのは、主に当該科目の授業においてであるが、その他、学生の学習にとっての基礎資料として有効と期待される。

また、本学にある地域連携・国際センターの国際科では、学生が在学中に海外特に途上国を訪問することにより、視野を広め、体験を豊にし、学びをより深いものにしていくことを希望している。その際には、実に有用な参考資料になるだろう。

本学で行われる研修会・講演会・大学祭等の折りに利用できる可能性もあり、有意義な参考資料になることが期待される。

『健康科学演習』におけるGWを促進するための教育方法の開発と検討

山本春江¹⁾，杉山克己¹⁾，勘林秀行¹⁾，佐藤伸¹⁾，千葉敦子¹⁾，井澤弘美¹⁾，廣森直子¹⁾

1) 青森県立保健大学

Key Words ①GW (グループワーク) ②コンセンサス学習 ③教育方法開発

I. 目的

本研究の目的は、昨年度本助成により開発した「コンセンサス」を得るための教育方法を『健康科学演習』に用いて、入学後初めてGWにのぞむ学生にとって、実際に話し合いを促進する教育方法として効果的かどうかを検証することである。

II. 研究方法

1. 対象；1年前期『健康科学演習』履修生225名。2. 方法；調査自記式質問紙を用いて演習前後に集合調査を実施。3. 主な調査内容；1) 津村ら¹⁾による他者との対人行動に関する5項目(回答は7段階) 2) 津村ら¹⁾による自分の対人態度への思考に関する5項目(回答は7段階) 3) Gの課題達成度(%)と自分の達成感(%) 4) 課題達成に役立つと感じた言動(自由記載) 5) 課題達成に妨げになったと感じた言動(自由記載) 4. 授業概要；1) 4学科混合1G7~8人のG編成。2) 全体に①なぜ話し合いは効果的か②効果的なGWについて講義。3) コンセンサス課題の提示 ①とんぼの絵②G名(理由) 4) 各教室に分散してGW(80分) 5) 全体発表(80分) 5. 分析；統計ソフト HALBOU-ver. 7 を用いて前後の比較に paired- t 検定 ($p < 0.05$) を実施した。

III. 成果

質問紙配布数は演習前後とも225件で、回収数は演習前が223件、演習後が221件だったが、無効票を除き、前後そろった219件(97.3%)を分析対象とした。

まず、他者との対人行動に関する5項目の全てと自分の対人態度への思考に関する5項目のうち3項目は演習後有意に上昇した。つまり、「他の人の話に耳を傾け正確に理解すること」や「自分の意見や考えを主張すること」が重要であり、「相手の感情や心理状態を敏感に感じとること」「グループの中で起こっている人間関係に気づくこと」への理解が深まり、結果的に「グループ内の話し合いを促進すること」の重要性を理解し、話し合いを促進できるようになったことが示唆された。一方、「否定的なことを他の人から言われたくない」と「平穏な関係を保つため自分の気持ちを隠す事は重要だ」の2項目は有意差が認められなかったことから、ほぼ1週間という演習では、自分の意見に対してネガティブなフィードバックを前向きに受け止めたり、自らも率直に意見を述べるといった、開かれた人間関係を築くまでには至らないことを示したものと考えられた。今後の課題としたい。

次に、Gの課題達成度は平均86.6%、30G中27Gが80%以上と高かった。自分の達成感は72.3%で、80%以上は4Gであった。全てのGが自分の達成感よりもGの達成度が高かった。そして、課題達成に役立つと感じた言動は「積極的、肯定的な意見」「相手のことを考えた発言」が多く、反対に妨げになるのは「否定的・批判的な発言」「相手のことを考えない発言」「関係のない発言」などがあげられた。よって、学生は、本演習を通して、GWを促進あるいは妨げになる発言や態度について理解し学習したことが示唆された。

IV. 文献

1) 南山大学教育推進GP(代表津村俊充)編；教え学び支え合う教育現場間の連携づくりーラボラトリー方式の体験学習を核とした2つの連携プロジェクトー最終報告書，2009，25.

V. 研究成果の公表および活用

本年度の成果については、日本公衆衛生学会等にて公表する予定である。

県会議員・市町村議委員のための社会保障研修

企画提案・実施者：増山 道康¹⁾

1) 青森県立保健大学健康福祉部社会福祉学科

1. 企画の背景

この研修企画は、昨今の社会保障制度のめまぐるしい改正により、行政職員や地域住民が対応できない場合が多くなっている状況の下で、地方議員が住民からの相談や請願・陳情に対応しきれない場合が起きていることを解消することを意図した。平成 20 年度に東京都内で関東以北の地方議員を対象とし生活保護に関する研修会が開催されたが、その中で生活保護以外の社会保障制度の研修機会の設定が要請されている。本研修は、そうした地方議員の要請に対応することも考慮して企画された。

2. 研修目的

本研修は、青森県内の地方議員（県会議員・市町村議員）を対象として、社会保障制度の運用と関連施策の展開の現状を理解し、議員が、住民からの相談、請願・陳情に的確に対処できるノウハウを会得することを目的とした。

3. 研修受講者

職種：青森県会議員・市町村議員

受講者数：10 人（別添名簿の通り）

4. 開催日時および場所

平成 22 年 3 月 6 日（土）13 時～17 時

青森県立保健大学教育研究 C 棟 2 階 N 1 講義室

5. 研修内容

講師：青森県立保健大学健康福祉部社会福祉学科 准教授 増山 道康

内容：事前アンケートに基づき、講師と参加者が社会保険（年金・国民健康保険及び労働保険）、雇用対策、生活保護について質疑応答方式で研修を行った。

（別添資料の通り）

6. 研修の成果および評価

参加者は少数であったが、社会保障について知識を得たいとする意欲は高く、以前から住民対応を迫られていることもあり、高度な質問内容であった。特に、雇用対策や国民健康保険に対する専門的な知識修得に熱心であった。

議会開催時期であり多忙を理由に不参加であるが資料の請求があった。これまで同種の研修は党派や支持母体によることが多く、中立的で党派横断的な立場での開催は少なかった。参加者が少数に留まった理由はこのことが大きいと参加者から示唆された。但し、需要自体は多いと考えられるため、今後も継続して開催していきたい。

研修名（地域保健福祉と生涯学習に関する研修会）

企画提案・実施者 1) 所属 社会福祉学科 渡邊 洋一
 栄養学科 廣森直子

1. 企画の背景（MSゴシック 10.5ポイント）

この企画の背景には、少子高齢社会に備えて地域包括ケアの推進がいられている。しかし、専門職だけで包括ケアを進めて行くには限界がある。そこで、生涯学習の視点を組み入れることで、市民参加やボランティア養成に繋がることが期待できることがある。

2. 研修目的

この研修企画は、「保健医療福祉」と「生涯学習」と「市民活動」をテーマとして、学習機会や参加動機やボランティア活動意識などを保健医療福祉の領域全体について研究・研修の企画進めることが目的である。さらに「地域」をキーワードにして、地域を基盤として市民活動が推進される機会とした。

3. 研修受講者

職種：保健医療福祉の専門職（15名）や市民活動者（10名）や
 学生・院生（12名）やその他（2名）の参加が二回の研修会であった。
 受講者数：修了者数 39人（のべ参加者数 39人）別紙名簿

4. 開催日時および場所

第一回 9月19日（土） 午後1時から5時 本学B棟2階会議室
 第二回 11月20日（金） 午後1時から5時 本学B棟2階会議室
 その他 随時 準備会を開催する。

5. 研修内容

第一回 9月19日（土） 講師 小山内誠（青森NPOサポーターセンター副理事長）
 講義内容 青森の市民活動・生涯学習NPO活動について報告
 研究会 青森のNPO活動・保健福祉医療活動について報告
 討議
 第二回 11月20日（金） 講師 岡本栄一（大阪ボランティア協会理事長）
 講義内容 市民活動と生涯学習
 研究会 青森のNPO活動・市民活動について報告
 討議
 準備会 随時渡邊研究室で実施

6. 研修の成果および評価

この研修企画事業では、準備会2回と研修会二回を持つことができた。県内の専門職と市民活動の担い手や大学院生の参加があった。この研修会を持つことによって、地域包括ケアの実施体制や地域保健福祉の展開に関する横断的な視点を確認することができた。結果として、青森県の市民活動を生涯学習機会が豊かになることで、地域包括ケア推進に市民参加をはかれる土壌を醸成する機会となった。

看護職のための「English Skill Up」セミナー in Aomori 国際的に活躍するための看護職に必須の専門英語のスキルを青森で学ぼう！

織井優貴子¹⁾ 飯田恭子²⁾

1) 青森県立保健大学 2) 日本医療科学大学

1. 企画の背景

看護領域の高学歴化はきわめて早い速度で進んでいる。大学院、博士課程の開設も急増し、高度に専門的な語学に対する力量が求められている。先進的な看護理論はほぼすべて英文表記された論文、報告、書籍等で国際的に発信されており、専門職にはこうした内容を聞き取り、読みこなす能力が求められている。

また急速に進展する国際化・高度情報化によって、医療現場の国際化もすすみ、高度専門職として本格的なコミュニケーション能力や、海外発信能力が求められてきている。

国際化社会にあっては国際共通語としての英語力があらゆる領域で必須と認識されており、特に医療領域では重要で、看護職のみが遅れを取っていられる時代ではない。

看護・医療専門領域の英語力は、一般英語とは極めて異なり、用語・概念・理論また専門の内容を十分理解していなければ読解、作文は困難であり、正確に理解することが出来ない性質のものである。裏返せば、専門職であればこそ、効果的・系統的学習法にのっとりて研修を行うことにより、真に必要な力量を最も効率よく身につけることができる。

2. 研修目的

国際的に通用する看護職になるための専門語学力向上のコツを知り、最も効率よく英語力アップをめざす。

3. 研修受講者

職種：看護師、看護系大学教員

受講者数：12人

4. 開催日時および場所

平成 21 年 11 月 21 日 9:30~16:00 青森県立保健大学 A 棟

5. 研修内容

① Basic Nursing Skill

* 臨床英語、専門語の語源からのマスター

Assessment, Patient teaching

* 語源から徹底することによって、専門語彙の飛躍的増加法訓練

② Reading Comprehension

最新看護論文の効率的な速読読解力養成。

英文論文アブストラクトの速読読解、書き方。

③ Listening

専門内容（基礎） 聞き取り訓練

6. 研修の成果および評価

終了後のアンケートで参加者の 100% が本研修に参加して良かったと答えている。特に、医療英語の学び方や身につけ方など、英語を楽しく学ぶことが出来、さらにグレード別にセミナーを企画してほしいという意見が多かった。参加者の背景が様々だったことから次回は、グレード別の企画を実施したいと考えている。

Nursing Simulation in Aomori シミュレータを活用した看護教育システム設計：一歩進んだ患者急変対応スキルからの新たな発見！

織井優貴子¹⁾ 池上敬一²⁾ 浅香えみ子³⁾ 船木淳¹⁾ 伝法谷明子¹⁾

1) 青森県立保健大学 2) 獨協医科大学越谷病院救命救急センター 3) 獨協医科大学越谷病院

1. 企画の背景

現在の医療教育の課題は、高度化・複雑化する医療の中で、質の高い安全な医療の実践家をどのように養成するかである。今後の看護教育は、看護実践能力を強化することにポイントが置かれ、「さまざまな症状や徴候を再現するシミュレータの有効な活用」が推奨されている。

医療を模擬体験する「シミュレーション教育」によって、「知識」を「実践力に変換する」ことの必要性が提唱されている。欧米においては「シミュレーション・ラボ（疑似病室）」を設け、あらゆる医療の模擬体験と「繰り返し学習」が実施され、その成果が報告されているが、本邦ではその試みが始まったばかりである。

2. 研修目的

- 1) 看護教育・看護師育成におけるシミュレーションの必要性を理解する。
- 2) 学習者の内的学習を促進する方法について理解し、フィードバックとデブリーフィングを使い分けることができる。
- 3) 看護教育・看護師育成に必要なシミュレーショントレーニングを設計と実践方法が理解できる。

3. 研修受講者

職種：看護師、看護系大学教員

受講者数：26名

4. 開催日時および場所

平成 22 年 3 月 21 日 9:30~16:00 青森県立保健大学 A 棟

5. 研修内容

- 1) 看護教育におけるシミュレーション教育の導入と今後の展望

医学教育の立場から 池上敬一

看護基礎教育の立場から 織井優貴子

看護継続教育の立場から 浅香えみ子

- 2) 高性能シミュレータとは

- 3) 高性能シミュレータを活用した看護教育システム設計

6. 研修の成果および評価

終了後のアンケートで参加者の 100% が本研修に参加して良かったと答えている。特に、シミュレーション看護教育の有用性と新人看護師研修への導入など非常に関心が高く、継続してセミナーを企画してほしいという意見が 100% であった。参加者の背景が様々だったことから次回は、グレード別の継続した企画を実施したいと考えている。

がん患者サポートグループのためのファシリテーター育成セミナー

織井優貴子¹⁾ 太田富美子²⁾ 石澤智子²⁾ 一戸真紀³⁾ 田中純子⁴⁾ 種村健二郎⁵⁾

1) 青森県立保健大学 2) 青森県立中央病院 3) 青森市民病院

4) 青森市立高等看護学院 5) 武蔵野大学

1. 企画の背景

グループ療法、サポートグループは、先行研究にて、その必要性と有効性が報告されている。しかし、青森県では、それらのファシリテーターが育成されておらず、運営に至っていない。大腸がん患者を対象にした介入研究では、がん患者の心理的サポートは患者のQOLを向上させると示唆されており、本企画により患者の精神的サポートのできるファシリテーターを育成し運営の基盤を作ることは、青森県のがん医療の向上につながると考えた。

2. 研修目的

がん患者のサポートグループのためのファシリテーターを育成し、青森県初のがんサポートグループのリーダーとして活躍できる人材を育成する。

3. 研修受講者

職種：看護師、看護系大学教員

受講者数：修了者数 15人（のべ参加者数43人）

4. 開催日時および場所

第1セッション：平成21年12月12日 9:30~16:00 青森県立保健大学A棟

第2セッション：平成22年1月23日 9:30~16:00 青森県立保健大学A棟

第3セッション：平成22年2月20日 9:30~16:00 青森県立保健大学A棟

5. 研修内容

（研修内容・研修方法、講師などの概略を記載してください。）

【第1セッション：サポートグループとは】

がん患者のサポートグループの目的と効果を導入の講義し、実際の患者にゲストスピーカーとして「患者の立場からサポートグループに求めるもの」をお話いただいた。次に、グループ療法の意味を理解するために参加者を4つのグループに分け、ファシリテーターとその役割を実際に体験する演習を行った。

【第2セッション：教育的サポートとは】

実際にサポートグループを運営することを視野に入れ、参加者の選定やグループ分け、プログラムの構成、ファシリテーターの役割について講義を行った。次に、自分の生活習慣またはストレスについて記載した課題について、グループに分かれ自由に語る演習を行った。また、客観的に自分の傾向を知るために、参加者のストレスを測定や性格傾向測定を行った。

【第3セッション：ファシリテーターの実際～傾聴～】

傾聴（告知、インフォームド・コンセント、サポートグループ、自分を知ることの意味）について武蔵野大学看護学部教授である種村健二郎先生に講義いただいた。

6. 研修の成果および評価

参加者の約85%が本研修に参加して良かったと答えている。サポートグループとは何かから始まり、演習形式での実体験、運営、自己の傾向や課題を学んだ参加者からは、是非実践の場をつくりたいという声が挙がったことから、サポートグループの運営が期待できる。また、実際に運営してから直面する問題もあると予想され、来年度にステップアップ研修を希望する声も多かったことから今後のフォローアップも必要と考える。

家族システムケア ステップアップセミナー（初級コース）

中村由美子¹⁾、小林奈美²⁾、相星香³⁾、田久保由美子³⁾、
杉本晃子¹⁾、内城絵美¹⁾

1) 青森県立保健大学 2) 北里大学 3) 北里大学大学院

1. 企画の背景

少子高齢化・核家族化などの社会状況の変化により、児童虐待や介護問題など様々な家族問題がクローズアップされてきている。わが国では、1990年代より家族そのものに焦点をあててケアをする家族看護学の考え方が看護においても取り入れられ、青森県では1999年から本学が中心となって「青森県家族支援研修会」(1999-2001年)や「家族看護学研修」(2003・2004年)を開催し、家族支援のための専門知識や技術の習得をめざしてきた。その成果として、臨床や地域における家族支援の必要性について理解されてきており、2005年には青森県家族システム看護研究会の発足、2008年からは青森県立中央病院におけるユニフィケーションの一環として家族看護モデル病棟を設けて家族看護実践の推進へと発展を遂げてきた。

今回、青森県における看護の質の更なる向上を目指して、看護師の家族看護の実践力を身につけるための研修が必要であると考え、本研修を企画した。

2. 研修目的

青森県における看護職者（保健師・助産師・看護師）の、臨床や地域における家族看護実践能力を高めることを目的とする。また、実践力を養うための専門職の研修プログラムや教育方法を確立する。

3. 研修受講者

職種：看護師 受講者数：(1/9) 22人、(1/10) 18人
(のべ参加者数 40人、うち両日参加者 17人)

4. 開催日時および場所

日時：平成 22 年 1 月 9 日(土) 10:00～16:00、平成 22 年 1 月 10 日(日) 10:00～15:00
場所：青森県立保健大学 A棟 1階 A112 講義室

5. 研修内容

1) 講義 (3時間)

カルガリー家族アセスメント／介入モデル (講師：小林奈美、中村由美子)

2) 演習 (6時間)

・家族劇の製作・発表

・カルガリー家族アセスメント／介入モデルの実際～面接の演習

(ファシリテーター：中村由美子、田久保由美子、相星香、杉本晃子、内城絵美)

6. 研修の成果および評価

研修終了後のアンケート結果では、研修に対する満足度の平均点は 10 段階評価で 9 点と高く、「普段の情報収集等の際に活用していきたい」など、臨床における家族看護実践への活用を期待できる参加者のコメントが多く寄せられた。グループワーク・ロールプレイなど演習中心の研修方法を取り入れたこと、参加者が行ったロールプレイの録画を再生しながら家族面接法の解説や助言を行ったことによって、参加者は家族看護を実践するための具体的な内容について理解を深めていた。

一方、「(研修内容の実践は) 難しいと感じた」という回答もあり、研修後のフォローアップなどの必要性も示唆された。しかし、「今後も学びたい」「もっと面接のテクニックや家族看護を学びたい」という声は多かったため、多くの参加者の家族看護に対する学習意欲を引き出すことができたと考えられる。

生活と健康シリーズ No. 15 リンパ浮腫ガイドブック Vol. 3

木村 恵美子¹⁾

1) 青森県立保健大学

1. 要旨

第1部イラスト編、第2部解説編、第3部セルフケア編の3部構成から成る。

第1部と2部の内容は、リンパ管の働きと流れ、リンパ浮腫の意味、起こる部位、リンパ浮腫の種類と原因、主なケア方法（リンパドレナージ、清潔ケア、圧迫療法、動くこと）暮らしの中の予防（採血と血圧、虫刺され、針灸・マッサージ、温泉と旅行、日焼け、ほてるときの冷やし方、体を締め付けないこと など）である。

第1部は患者さんたちが分かりやすいように、全部イラストを配し、コメントをつけた。

第2部は同じ内容を詳しく解説し、むくみの成り立ちやケアの理由を正しく理解できるように工夫した。

第3部は、このガイドブックは周手術期にある患者さんたちへのリンパ浮腫指導時に使われることが多いため、退院後のセルフケアを見て実践できるように、1つ1つセルフケア時の手順をイラストした。加えて、本ガイドブックから退院時に測定した腕や脚の周囲径を記録できるように計測表を加えた。

2. 冊子の体裁

総ページ数 21p、全カラー使用

3. 活用方法

1) 本ガイドブックは、H21年度申請をもって、3年目である。これまでのものは現在、青森県立中央病院、十和田市立中央病院、八戸赤十字病院、八戸労災病院などで、主に外科病棟や産婦人科病棟での退院指導の際、外来患者への指導時に使用されている。

2) 青森県内のリンパ浮腫研修会、患者会の講演などにおいて、本ガイドブックを用いて症例を照らし合わせながら演習している。

3) がんの症状マネージメントの1つとして、コンプリメンタリセラピーの授業時に学生へ示して、指導の実践を演習する際に用いている。

4) 青森県内の病院だけでなく、広く地域の方々にも読んでもらい、知識と方法を得て、リンパ浮腫予防に寄与したいということを目的にwebからのダウンロードができるように青森県立保健大学ホームページ：地域連携・国際センターの中にリンクを配置してもらった。電話での問い合わせ時に紹介されており、役立っている。

Ⅲ. 国際科事業報告

(1) 平成 21 年度の国際科事業の概要 国際科委員会の開催状況

第 1 回 国際科委員会：平成 21 年 4 月 22 日

1. 中期計画について
2. 平成 21 年度年間事業計画についての審議

学際交流

- ・インジェ大大学校との交流(計画表配布)
- ・ベレノバ大学との交流(日程表配布)
- ・留学生研修支援
- ・職員・院生英語力増進クラス

地域交流

- ・あおもり地球市民講座
- ・英語教員地域交流
- ・アジア近隣諸国、調査・研究・学生参画プラン
- ・講演会

国際科学生活動

- ・国際科学生ボランティア活動

国際科広報・記録

- ・マニュアル更新
- ・広報・ホームページ
- ・研修発表と冊子作成
- ・地域連携・国際センター年報(原稿の確認)
- ・英語表記

3. 各事業予算についての審議

第 2 回 国際科委員会：平成 21 年 5 月 27 日

1. 前回議事録確認
2. 平成 21 年度事業計画の修正について
3. 中期計画について
4. 国際国流ポリシーについて
5. 感染予防対策及び研修生等受入時の窓口について
6. 事業報告

学際交流

- ・インジェ大大学校交流日程について(日程表配布)
- ・慶北大学について(資料配布・協定を目指して緩やかに進める)
- ・ベレノバ大学との交流(報告・新聞記事配布)

第3回 国際科委員会：平成21年6月24日

1. 前回議事録確認
2. 青森県留学生交流推進協議会の報告
3. 留学生の受入手順(案)について
4. 健康管理カード(海外用・自己申告カード検討)
5. 年間事業計画書(修正版配布)
6. 事業報告
地域交流
・講演会について

第4回 国際科委員会：平成21年7月29日

1. 前回議事録確認
2. 留学生の受入手順について(決定)
3. 事業報告
学際交流
・インジェ大学校との交流について
地域交流
・講演会について
その他
・ブラジルの研修生への対応(留学生研修支援・日本語授業を始める)
・研修生受入時の対応について

第5回 国際科委員会：平成21年9月24日

1. 前回議事録確認
2. 事業報告
学際交流
・ベレノバ大学からの礼状
・インジェ大学校との交流について(本学学生の帰国報告)
・留学生対象日本語クラスについて(授業概要、年間計画配布)
地域交流
・国際科講演会について(11月25日17:30~18:30 国立国際医療センターの小林氏を講師に依頼)
・あおもり地球市民講座について(名称および内容を変更する。市民公開講座 11月14日 13:30~16:00 予定)
その他
・国外からの研修生の受入時の対応について(資料配布)
・ロシア・ハバロフスク地方との交流事業について(資料配布)

第6回 国際科委員会：平成21年10月21日

1. 前回議事録確認

2. 事業報告

学際交流

- ・インドスタディツアーについて(ポスター案提示)

地域交流

- ・市民公開講座について(JICA 東北共催・学びの延長線上にある国際協力—国際協力市民公開講座—)
- ・国際科講演会について(講演会の前に、学内向けとして国際保健活動 自由集会 15:30~16:30 を設ける)
- ・留学生研修支援(12月日本語能力試験に向けて集中授業を開始)

国際科広報・記録

- ・海外研修発表会について(日程案)

その他

- ・ハバロフスク地方行政からの訪問を受けて
- ・スマトラ沖地震災害義援金募金活動について

第7回 国際科委員会：平成21年11月25日

1. 前回議事録確認

2. 事業報告

学際交流

- ・留学生研修支援について

地域交流

- ・国際協力市民公開講座(報告)

国際科広報・記録

- ・研修発表会(12月11日 17:30 仁済大学校研修報告、ベレノバ院生研修報告、ブラジル人研修生イローラさんに日本とブラジルに関する発表を依頼)
- ・新カリキュラム英語表記に関して

第8回 国際科委員会：平成22年1月27日

1. 前回議事録確認

2. 事業報告

学際交流

- ・アジア近隣諸国調査研究学生参画プラン (フィリピン・プロジェクトについて)
- ・留学生研修支援について(進捗状況)

地域交流

- ・講演会報告 (アンケート結果)

国際科広報・記録

- ・センター年報について(原稿依頼3月31日まで提出)

その他

- ・2010年度の活動案・記録保存活動について
- ・ハイチ地震災害救援金募金(募金箱設置・日本赤十字社に送金予定)

第9回 国際科委員会：平成22年2月24日

1. 前回議事録確認

2. 今年度の事業報告、まとめ、次年度への課題

(各事業責任者より実施報告と課題が提示される)

- ・仁済大学校との交流 (2009年度報告書作成中、韓国語の通訳確保が課題)
- ・ベレノバ大学との交流 (研修報告書が完成、隔年受入なので次年度の受入はない)
- ・アジア近隣諸国調査研究学生参画プログラム(フィリピン出張報告は後日委員にメールで送信する)
- ・留学生研修支援 (日本語能力試験3級合格、県国際交流協会への報告書作成、日本語授業実施報告書の配布、研修生ブラジルへ2月18日に帰国)
- ・国際科学生ポアンティア活動 (作業所を通して焼印を作成済み、予算を検討する)
- ・海外研修発表と冊子作成 (印刷業者には出さないが報告書をまとめ作成する)
- ・国際科市民公開講座 (JICAとの提携によるもので形は今年度同様とするか動かも含めて今後検討する)

3. ハイチ地震救援金募金の報告(日本赤十字社への送金済み)

(2) 平成21年度韓国仁済(インジェ)大学校との日韓国際交流

1. 仁済大学校から本学へ

(1) 研修期間・概要・来学者

期間：平成21年7月10日(金)～8月7日(金)

概要：7/10(金)～7/17(金) オリエンテーション, 病院・施設見学および学内で授業参加
7/21(火)～7/31(金) 黎明郷リハビリテーション病院・弘前脳卒中センター等で研修
8/5(水) 修了式 8/7(金) 帰国

学生：姜潤命(ガン ユンミュン) Kang Youn Myung 李章熙(リー ジャンヘ) Lee jang hee
金珍娥(キン ジンアー) Kim Jin Ah 金泰希(キン テフイ) Kim Tae Hee

教員：吳在燮(オー ジェセツ) Oh Jae Seop *7月10日(金)～15日(水)

(2) 宿泊先

7/10(金)～7/20(月)・7/31(金)～8/6(木)：本学ドミトリー

7/21(火)～7/30(木)：黎明郷リハビリテーション病院寮

(3) まとめ

- ①仁済大学校の学生は非常に熱心に見学・研修等に取り組んでいた。新型インフルエンザが流行していた時期であり、大変心配したが、無事に全日程を修了することができた。
- ②本学理学療法学科に来ていたブラジルからの研修生イローラさんと一緒に行動することになったが、英語でのやりとりでお互い助け合って、よい関係で研修を進めることができ、大変よかった。
- ③本年度は、通訳を県の国際交流員や弘前大学および青森中央学院大学の韓国人留学生に依頼したが、人数確保に苦勞した。次年度も同様に通訳の確保が課題と予想される。

2. 本学から仁済大学校へ

(1) 研修期間・概要・訪韓者

期間：平成21年8月21日(金)～9月6日(日)

概要：8/21(金) 青森→ソウル→釜山

8/22(土) 午前中：病院研修オリエンテーション

8/24(月)～8/29(土) 仁済大学校附属白(パク)病院での研修

8/31(月)～9/3(木) 仁済大学校で授業参加および学生と交流

9/4(金) 釜山→ソウルへ移動 ◎李先生引率

9/6(日) ソウル→青森へ

学生：田中 美香(たなか はるか) 神門 かす美(ごうど かすみ)

柿崎 彩加(かきざき あやか) 長岡 孝則(ながおか たかのり)

教員：李 相潤 訪韓時-8月21日(金)～26日(水) 帰国時-9月2日(水)～6日(日)

(2) まとめ

- ①研修先の白病院ではスタッフにとっても親切に教えてもらい、日本との違いなども知ることができた。また、仁済大学校では教員の講義を受け、学生達と交流を深め、勉強以外にも得難い体験をすることができ、充実した有意義な二週間であったと学生より報告があった。
- ②日常生活面で多少体調を崩した学生がいたものの、病院にかかるほど悪くならず、無事二週間を終了できた。

(担当者:理学療法学科 藤田智香子)

(3) ベレノバ大学交流事業

2004年から米国、ペンシルバニアの Villanova 大学と看護交流を行っています。2009年5月には Villanova 大学から看護学生7名、引率教員2名が研修に訪れました。丁度新型インフルエンザが流行し始めた頃の来日で、研修生の皆さんは成田空港におけるものものしい感染防衛対策の中、入国されました。青森に到着後も毎日健康チェックを行い、1日2回保健所に報告し、滞在中、誰一人体調を崩すことなく元気に研修を終えられました。

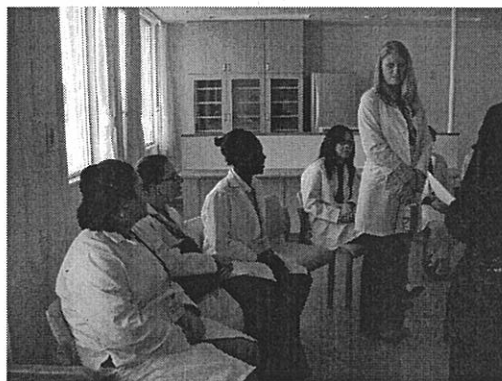
研修生たちは、本学での授業参加、県内の保健医療福祉施設見学、そして青森県知事を表敬訪問し大歓迎を受けました。Villanova 大学の教員からは、「救急 NP ナースの看護活動の実際」「ドクター論文と修士論文のクライテリアの違い」をテーマに特別講義をしていただき、学内外から沢山の参加者がありました。

米国の研修生に向けては、「アメリカと日本の医療の相違点」「日本のヘルスケアシステム」「日本のことばと文化」などの講義を行いました。

看護学科の3年生が中心になり、ねぶた衣装での歓迎パーティを企画し、研修生たちに浴衣を着せ、日本の文化に直かに触れてもらいました。学生たちは、両国の文化や名勝地の紹介、および、カラオケや回転寿司、温泉など、バーバル・ノンバーバルなコミュニケーションを駆使し、速やかに友好関係を築いていました。このたびも Villanova 大学の研修生から好評を得ることができ、ボランティアで参加した本学の学生も満足げでした。



電子カルテシステムや、院内助産院救急トレイの内容、配置に関する工夫感染症予防の取り組みについて、熱心に説明を受ける研修生たち。



緩和ケアユニットのオープンスペースにて、グループミーティングを開催。日本の地方の中核病院における、医療改善の取り組みと、ソフト面でのケアの細やかさに、多くの学びを得たと発言する研修生。



Let's play NEBUTA Dancing!
RASSERA~RASSERA~
RASSE! RASSE! RASSERA~!
とってもいい汗かきました。
(着付け役の教員も汗だくでした;)

担当者 山田典子

(4) アジア近隣諸国調査・研究・学生参画プラン

国際科のこのグループの、2009年度当初の目標と活動内容は以下の通りです。

内容：1. Study Tour (フィリピン) 2. Study Tour の情報提供 (ラオス、タイ他)、
3. 学生の過去の活動記録を保存
目標：教職員・学生・院生に途上国での国際的活動に関する情報提供とシステム構築

2009年度が終了しようとする今、振り返るならば、活動内容はおおむね達成できたといえるのではないかと思います。

学生が在学中、大学における勉強だけではなく、海外特に途上国を体験できればきっと大きな学びになると信じ、学生支援のためにできるだけのことをしてきました。今年度取り組んだのは、学生が、安全で安心かつ充実した海外体験ができるように海外の団体と連携することです。また、学生の現地での活動プログラムのモデル版の作成や、必要と思われる情報の収集です。この点については、インド版とフィリピン版の充実したものが仕上がったと思います。あとは、途上国体験をしてみたいという学生が来るのを待つだけとなりました。

もう一つのプロジェクトは、フィリピンにおいて、身体に障害をもつ子どもたちが学校へ通うために必要な車椅子支援と、それに付随する学校内での車椅子学習環境の整備やボランティアで行われている理学・作業療法活動への援助・指導を行うものです。フィリピンプロジェクトと名づけられたこのプロジェクトは、フィリピンセブ島にあるマンダウエ中央学校の通学区に住む身体に障害をもつ子どもで、車椅子さえあれば通学できるという子どもたちに車椅子の提供を行い、併せて特別支援学校教師へ障害をもつ子どもへの学習環境整備の指導、ボランティアセラピスト(理学・作業)に対する援助・指導を行うというものです。今年度はプロジェクトトライアルとして青森の皆様から贈与された車椅子2台を現地へ運び、優先度の高い子どもに提供し、有効に利用できるよう子どもに合わせて調整、その後、通学や学校内での学習環境を整備、同時にボランティアセラピストとリハビリテーションについて協議し、援助・指導を行いました。1台をスラム街から学校へ通う脳性麻痺の少女へ、もう1台を学校卒業後スラム内で外にも行けない環境にある脳性麻痺の少年に提供しました。少女には車椅子調整、学校内学習環境整備、ボランティアセラピストへのリハビリ指導を行いました。少年には車椅子調整、サポートする人々への車椅子の使用・修理方法の指導を行いました。また、2007年度に先駆けとして車椅子提供だけですが1台(マンダウエ市に隣接するラプラプ市の小学生)を運んでおり、今回、そのときに提供した車椅子の使用状況確認及び修理・指導も行いました。このプロジェクトを継続すると、確実に車いすを提供するルートとなると同時に、県内の①国際協力に携わるNPO法人②車いす業者③特別支援教育関係者④セラピスト(理学、作業、言語等)など、地域の資源を活用することとなり、卒業生の活用も期待できます。また、回数を重ねることで、フィリピンにおける社会福祉システム構築の一助となるような、県内人的・物的資源を活用した草の根プロジェクトへの転換も期待できると考えています。



(5) 留学生研修支援

本事業は 2006 年 4 月に開講されて以来、国際科事業として現在まで継続されています。本学が掲げている国際的支援の一つであり、本学の留学生を対象に、年間授業計画に基づき「日本語と文化」を学ぶクラスとして始まりました。日本語学習の言語的支援を中心に、日本の文化や生活環境に適応できるよう日常生活に必要な文化的側面も言語学習を通して学びます。

今年度は、青森県海外技術研修員として、ブラジルのサンパウロから本学理学療法学科に 7 月に派遣されてきた研修生（ダルバル・アシュウインクマル・イローラさん）を対象とし、8 月から日本語クラスを開講しました。日本語能力試験の 3 級取得を目指し、前半は語学の集中講義を行いました。もともと、イローラさんはサンパウロで日系人対象の老人ホームで働いていることから、少しでも多くの日本語を修得して帰りたいという強い意思があったため、語学力のアップを目指し熱心に取り組んでいました。その結果、12 月の試験では無事に 3 級を合格し、日常会話も無理なく生活できるほどの力がつきました。

また、本学では理学療法学科の専門性をいかし、施設訪問をしながら、多くの日本人と係わりをもち、日本のリハビリの現場を学んでいました。車椅子の調整方法等、母国に持ち帰ることができる専門的技術を修得できたことは、将来的にも大きな財産であったと思います。日本語クラスは、学科の専門性の学習を支援する意味でも協力できたものと思います。

12 月には国際科主催の海外研修・交流報告会がおこなわれ、イローラさんは、日本とブラジルの文化的相違について、パワーポイントを使用しながら日本語でわかりやすく説明していました。日本の文化を学び、日本語を学び、雪国の生活を知り、寒さと戦いながらも有意義な日々を過ごしたようです。係わった人々へ感謝しながら、2 月中旬にブラジルへ帰国しました。

(担当者: 川内規会)

留学生対象 日本語クラス <授業概要>

2009 年度

授業科目	「日本語と文化」
概要	毎週（木曜・1. 2 時限）
担当者	川内規会 (KAWAUCHI Kie)
授業のねらい・目標	日本語学習に必要な最低限の「基礎知識」を習得し、日本語そのものについて「他の言語(母語)と比べ、どのような特徴をもっているのか」を学びます。また、外国人学習者が頻繁に陥る日本語の誤使用例や、考え方の違いからくるトラブルなどを、あらかじめ知ることで、考え方を柔軟にし、日本での生活をスムーズに行う手助けをします。日常生活レベルの会話表現を学び、表現力の訓練、実践を行うことから、日本語によるコミュニケーション能力を身につけることを目指します。さらに、日本で生活する上で、その言語が使用されている文化的背景を知る必要があるため、生活マナー、行動様式、日本独特な生活環境などの文化的側面も言語学習を通して学びます。
要点	日常生活レベルの会話表現 日本語の基礎（日本語能力試験 3 級対策）
テキスト	8 月～12：「ペアで覚えるいろいろなことば」武蔵野書院 「日本語能力試験対策 項目整理 3 級問題集」凡人社 12 月～2 月：「ペアで覚えるいろいろなことば」武蔵野書院 および 自主教材
レベル	初級・中級対象(3 級以上)

(6) 学生ボランティア活動について

国際科委員会における学生ボランティア活動は、今年度計画そのものにストップがかかってしまったために、実質何も活動できなかった。

昨年度、学生の意見を募集したりして、国際科委員会としてのノベルティグッズ等を作製した。この活動は市内の障害を持つ方が通う作業所に協力を依頼する等、可能な限り地域・学生と連携して行ってきた。(本学学生・インジェ大学校の学生と作業所の障害者の皆様との交流も含めて行ってきた)

今年度も同様の年度計画が立てられていたが、諸般の事情により計画そのものが実行できなくなってしまった。予算はついているものの完全に宙に浮いた形となってしまった。

(しかしながら、昨年度までの積み重ねは無駄にはできないので、作業所(ふれあい作業所)との連携は保つため、インジェ大学校学生が作業所の見学に伺う時には本学理学療法学科学生に応援を要請して協力してもらった。インジェ大学校学生、本学学生、作業所の皆様との3者交流は今年度で3回目であるが、今後も継続していきたいと考えている。)

別の研修や報告会等で、何かしら学生に手伝って頂けないか声掛けも行ったが、テスト等カリキュラム上の問題が、時間が取れないケースがほとんどであった。

来年度、もし学生ボランティア活動に対するサポートを継続するならば、“国際科委員会としての学生ボランティアに対するサポートとは何か？”を、全体で検討する必要があるのではないかと考える。

(担当：理学療法学科 長門五城)

(7) 海外研修・交流報告会について

以下の通りの内容で海外研修・交流報告会は実施された。

【実施日時】

平成 21 年 12 月 11 日 (金) 17:30~18:30

【実施場所】

青森県立保健大学 A 棟 1 階 A112 教室

【発表内容】

『インジェ大学校との国際交流報告』

理学療法学科	3年	柿崎彩加さん	神門かす美さん
		田中美香さん	長岡孝則さん

『ブラジルと日本の違いについて』

理学療法学科	研修生	ダルバル・アシュウインクマル・イローラさん	
--------	-----	-----------------------	--

『アメリカ・フィラデルフィアにおける看護研修での学び ～CNS・NPの活動を通して～』

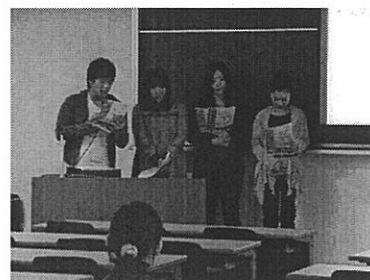
看護学科	教員	杉本晃子さん
大学院博士前期課程	2年	井上昌子さん

報告会は学生の参加しやすい日時・時間設定をしたのだが、学部1年生の授業と重なってしまい、昨年度報告会のように大盛況とはいかなかったが、3つの報告が発表され、中身の濃い報告会となった。特に、今年度はブラジルから研修に来られた理学療法士のダルバル・アシュウインクマル・イローラさんの報告もあり、日本とは異なる文化に生で接することができた。また、理学療法学科における韓国インジェ大学校との交流報告は恒例となったが、これからインジェ大学校との交流を希望する学生にとっては、交流の具体的な中身を知る機会なので、今後も継続して報告が行えるようにしたい。看護学科におけるベレノバ大学との交流は大学院生をメインに行われているが、今回の報告においても、学部生とは異なる専門家としての視点に溢れた報告であった。特に、CNS (clinical nurse specialist) や NP (nurse practitioner) に関する話題は、日本においても実践・検討されているものであり、大変興味深いものであった。

次年度以降の報告会は、海外研修・交流という限定された範囲ではなく、広く本学が関与する海外での活動(学会報告や海外事業活動等)を対象とした報告会にしていくことが望まれる。バラエティに富んだ報告を学生に提供することで、学生の視野や行動範囲に対する意識に良い影響を与えるのではないかと考える。

また、報告会の開催時期についてであるが、学部学生のカリキュラムが年々複雑且つタイトになっていく中で、最適な時期を選ぶことは至難の業である。報告会の主対象を限定する等の思い切った方法を取らなければならないかもしれない。

(担当：理学療法学科 渡部一郎)



(8) 国際協力市民公開講座について

事業名：国際協力市民公開講座『学びの延長線上にある国際協力』

日時：平成21年11月14日(土) 13:30~16:00

場所：青森県立保健大学 A 棟 A111 教室

内容：13:30~ 国際協力のしくみ -なぜ国際協力をするの? 熊谷彩子 さん

13:40~ 報告1 ホンジュラスでの活動

-いのちを守る町の保健所-

青年海外協力隊経験者

大賀佳子さん(保健師)

14:10~ 報告2 ミャンマーでの活動

-ハンセン病とリハビリテーション-

JICA 短期専門家経験者

長門五城(保健大学 理学療法学科)

《休憩》

14:50~ H20年度 JICA 中高生エッセイコンテスト

最優秀賞受賞作品発表&海外研修報告

松風塾高等学校3年

石井陽平さん

三本木高等学校附属中学校2年

野坂創一さん

15:20~ 報告者を交えてのシンポジウム

「今の自分にできることって何だろう？」

司会：川村 宏義 さん (高等学校教諭)

昨年度までの『あおもり地球市民講座』を引き継ぐような形で、実施形式を変えて公開講座を開催した。今回の講座は、「夢を持ち、その実現のために目の前の学びを大切にし、学びの積み重ねの延長線上に国際協力に繋がるフィールドがある」ということを理解して頂くために、小学生から大学生を主対象に実施した。参加者は高校・大学生を主に43名を数えた。参加者のアンケート結果によると、講座自体は概ね好評のようであった。特に、中学・高校生が、具体的に行動して海外研修に行ってきたという事実は、大学生等にとっては良い刺激になっていたようである。また、学生等は日本以外の国を“知る”ということが、とても大切なことであり、知らないことが多過ぎる自分達の日常についても、反省を含めて感じていたようである。シンポジウムでは、パネリストが“なぜ海外に行って仕事をしたのか？なぜ海外研修付きコンテストに応募したのか？”等を語り、最終的には、海外が決して遠くはないということ、海外に行く決断・決め手は、結局、目の前にある学びを大切にするということに尽きるというまとめとなった。

(担当：理学療法学科 長門五城)



(9) 講演会

平成 21 年 11 月 25 日 (水) 17 時 30 分から 18 時 30 分まで、本学 A101 教室において、「国際的な感染症の現状と対策～感染症を通し世界を考える～」をテーマに小林潤先生による公開講演会を開催しました。

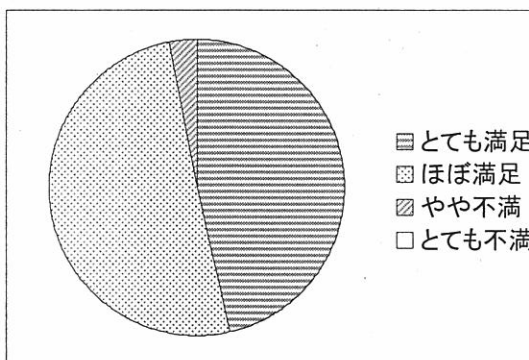
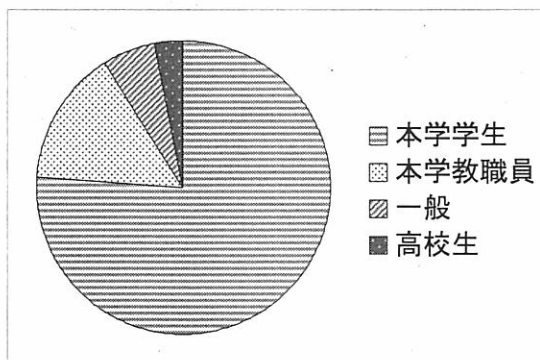
《講師紹介》

国立国際医療センター 国際医療協力局 派遣協力第一課にご所属され、感染症対策グループ長として、世界的な感染症対策の第一線でご活躍されております。特に国際保健（学校保健、感染症対策全般、地域保健）を専門とされ、1991 年より JICA 専門家として、ブラジル・カンピナス大学消火器病院研究・診断プロジェクト、ラオス公衆衛生プロジェクト、ラオスマラリア対策プロジェクト、タイ・国際寄生虫対策アジアセンタープロジェクト、タイマヒドン大学熱帯医学部国際寄生虫対策アドバイザー。2008 年には NGO メータオクリニック支援の会を設立し、タイ北部で難民支援活動を展開されております。

《講演概要》

新型インフルエンザが流行して世界中がまた感染症に注目している。ワクチンや抗インフルエンザ薬の普及による準備が進んである程度の制圧には成功するだろう。しかしながら、開発途上国特に貧困層への被害は全く推定できないものとなっている。またエイズ・結核・マラリア対策に巨大なファンドが集中し対策が進行する中、僻地・貧困層での蔓延は残された大きな問題となっている。さらに、これ以外の大きな問題として、近年日本のイニシアチブにおいて少しずつクローズアップされてきた顧みられない熱帯病 (Neglected Tropical Disease) は貧困層に蔓延して、対策の進展が強く望まれている。これら地球規模において必要な感染症対策を国際開発での位置づけも踏まえ講演頂いた。

本年は公開講座として、地域の方々が参加できるように夕刻に開催し広報を行いました。本学学生、教職員の他、一般（小学校教諭、養護教諭）、高校生など、約 80 名の参加がありました。インフルエンザが社会を賑わしている日本の現状ですが、日本ばかりではなく世界的な視点からわかりやすく説明頂き、世界的な感染症の現状や熱帯病について学習や情報を入手する機会がない学生や一般の方には、大変好評を頂きました。



講演会前には、「国際保健活動 自由に語る会」として、気楽に国際保健について話しをする場を設けました。国際保健、国際協力に興味のある学生 6 名と留学生 1 名、その他教員数名が集い、国際保健、国際協力について、具体的に意見交換をする機会となりました。

担当者：山本 加奈子

(10) 2009年度 国際科年間事業計画

分類	国際交流									国際交流関連の地域交流			国際科広報・記録		
	仁済大学 校との交流	ペレノバ大 学との交流	慶北大学 校との交流	アジア近隣 諸国 調 査・研究・ 学生参画 プラン	留学生研修 支援	職員・院生 英語力増 進クラス	国際科 学生ボラン ティア活動	研修発表と 冊子作成	英語表記	国際科市 民講座	英語教員 地域交流	講演会	マニュアル 作成	広報	年報
内容	PT学科教員・ 学生の交流を 続行	国際看護を学 ぶ学生の訪日 の支援体制作 り和本学から のペレノバ研 修計画	今後検討	1. Study Tour (フィリピン) 2. Study Tour の情報提供 (ラオス、タイ 他)、3. 学生 の過去の活動 記録を保存	・短期留学生の 「日本語と文 化」のクラスを 担当 ・留学生の全般 的支援	国際的研修や 交流に必要な 英語力を養う クラスとして、 目的、プログラ ム、方法論の 再検討をする	外国客の学内 案内(英語)、交 流、交換大学 生の歓迎会、 学内表記(韓国 語、英語)グッ ズ作成、その他 の活動の拡大 プラン	国際的に研修 をした学生お よび教職員に よる発表と報 告書作成(後 期)	留学生確保や 国際的交流を 視野に入れ、 新カリキュラ ムに対応でき る英語表記を 準備する	学生、一般市 民対象	拡大プランの 検討:地域貢 献	国際的な視点 から本学の特 性を活かした 講演を行う	マニュアル 作成と伝 達、アップデ イト	・HP更新 ・センターパ ンフレット作 成	年報作成
目標	・学生4名・教 員1名の受け 入れおよび本 学学生の韓国 研修の無事修 了 ・他学科の交 流に関する情 報収集	・今年度の実 習受け入れ準 備と実施 ・来年度の本 学からの研修 生の派遣とそ の支援の準備	今後検討	教職員・学生・ 院生に途上国 での国際的活 動に関する情 報提供とシス テム構築	・ペレノバ、およ び仁済の学生 に日本語の表 現と行動様式を 教える授業を担 当する ・留学生 や研修生の 大学生生活の相 談および支援 を行う	継続できる方 法の検討	1. 本学オリジ ナルグッズのサ ンプル作成 2. 学内表記 (韓国語)の作 成 3. 21年度 ペレノバ大学と の交流のため の準備	年内(12月ま で)に報告会 を実施し、年 度内(来年3月 まで)に報告 書(冊子)を作 成する。	新カリキュラ ムのための表 記の整理	・JICAと提携し て県民一般を 対象に、地球 規模の課題を 考える場を提 供。 地球のステー ジの今後につ いても考える。	・高校訪問の 要請があれば にいつでも 対応できる準 備をしておく ・オープン キャンパスで English Café を実施	国際協力への 興味が深まる ような学生を ターゲットとし た講演会を1回 実施する	サイボウズ 上のマニユ アル管理と、 必要時見直 しを行う。	・センターHP 作成案に準 ずる ・セン ターパンフ レット作成案 に準ずる ・記録物の整 理、保管	2月中に各事 業の原稿を集 め、WEB上に 載せる